

| | | | | |
|---|----------|-------------------------------------|-----------------------------|------|
| 15 | 課題番号 | 研究課題名 | 研究代表者 | 評価結果 |
| | 17109006 | 転写を阻害するDNA損傷の細胞応答機構とその異常疾患の分子遺伝学的解析 | 田中 亀代次 (大阪大学・大学院生命機能研究科・教授) | A |
| <p>(意見等)</p> <p>これまで、色素性乾皮症やコケイン症候群などの原因遺伝子の解明とその産物の生物学的機能について研究してきており、優れた成果を上げてきている。</p> <p>本研究でも、転写と共役した修復機構で、XPGの役割を解明し、疾患との関連をあきらかにしたことは高く評価できる。分担者の転出にもより、多少の遅れが見られる部分もあるが、発表論文もインパクトの高いものが多く、優れている。</p> <p>今後の研究の更なる発展を期待したい。</p> | | | | |
| 16 | 課題番号 | 研究課題名 | 研究代表者 | 評価結果 |
| | 17109007 | 遺伝的負荷の高い脳血管疾患の遺伝疫学と高リスク者戦略による2次予防 | 小泉 昭夫 (京都大学・大学院医学研究科・教授) | A |
| <p>(意見等)</p> <p>くも膜下出血は、致死性が高いために予防が必要な疾患である。本研究はその原因となり得る病態の遺伝的解析を、疾患の集積している家族等の協力を得ながら行っている。これまでの成果として、脳動脈瘤の感受性遺伝子を同定し、Moyamoya病や脳動静脈奇形においても、連鎖解析を行う等、解析が進んでいるように思われる。また一般にこのように患者およびその家族を対象とした研究は遂行が困難と考えられており、その困難な状況の下で質の高い研究であると評価できる。</p> <p>しかし、その一方で同定した感受性遺伝子のタンパクコーディング領域の変異による寄与率は患者家族で10%と低く、更なる検索が必要である等残された課題も少なくはない。また、最終的には「公衆衛生学的予防戦略の樹立」を意図しているようであるが、そのためには、疾患の遺伝的解析だけでなく、他の要因殊に環境要因の把握も必要と思われる。報告にはそれに関する記述が認められないようであるが、今後検討されるものと考えたい。</p> | | | | |